

ラオスの こども通信



79号
2021年2月発行

発行：(認定)特定非営利活動法人 ラオスのこども

- 学校図書館がもっと進化するために ▶ p.1
- はじめる・つながる・つくりだす ▶ p.2
- 「ラオスのこども」の仲間たち ▶ p.4
- メコンのほとり「新・高速道路」 ▶ p.4



*写真の説明はp4をご覧ください。

学校図書館がもっと進化するために

ラオスでは小学校の就学率が向上し、今日、中等学校(中学・高校)の整備に力が入られています。「ラオスのこども」でも、中等学校の図書館・図書室の開設とともに利用の促進を支援する取り組みが増えています。

中等学校は、教科も多く、内容も難しくなるため、教科学習のサポートができる図書館の活用が必要になってきます。

そこで当会は、2019年度に開設したボンホーン郡ボンサイ中等学校(生徒数983人)で、2020年12月8～10日にかけて「図書館応用研修」を実施し、図書館担当・教科指導の先生たちと一緒に「授業における図書活用」を考えました。

まずスタッフ研修、そして教員ヒアリング

応用研修の開催にあたって、最初に取りかかったのは、ラオス事務所スタッフの研修です。これまでスタッフは、図書館開設支援で、本に親しむための様々なアクティビティ(読み聞かせ、ゲーム、劇など)を学校に伝授してきましたが、今回のように学校の授業にふみ込んで、先生とコミュニケーションをとりなが

ら活動を提案していくのは初めての経験です。図書館員養成の専門家下田尊久さん(藤女子大学)の協力のもと、オンラインで講習・実習をくり返し、学校図書館が、授業などの教育活動と繋げることで「情報・学習」の場としての役割を果たせることを理解し、実際に授業で図書活用をするための手順や心得を学びました。

研修の前に、スタッフは図書館担当の先生たちに聴き取りをし、ふだんどのように授業を行っているか、事例を示し実際に活用できそうか、実施にあたり課題や問題はないか確認しました。

先生たちの高い関心度

いよいよ応用研修当日。12教科から代表の先生が集まり、あわせて15名が参加しました。1日目、はじめに下田さんからのオンラインでのレクチャーで、「中等学校図書館の役割と機能」を学びました。午後はオリエンテーションを開催し、本探しゲームや、今までに読んだ本、活用した本/したい本を披露して、図書館のどこにどんな本があるのかを把握しました。



スタッフが提案した図書を様々な教科学習に活用するアイデア集



実習で、授業での図書活用計画を検討する先生たち(ラオス語チーム)

研修3日目は、スタッフが授業における図書活用の事例(5年生国語、4年生地理)について、活用計画をまとめたアイデアシート(下写真:投影スライド)を使いながら説明しました。

その後実習で、同じ系統の教科で4つのチームに分かれ、どの教科のどの学習項目で、どんなふうに図書を活用した授業を展開するか、アイデアシートにまとめました。教科書や教員指導書とにらめっこしながら、いろいろな図書を引っ張り出して、活用方法を検討する先生たち。発表では、生物の「身体の内臓」授業で各器官の働きをグループに分かれて図書館で調べたり、数学では絵本のなかに登場するモノの長さや距離を測ってみたり、とユニークな活用アイデアが出てきました。



数学の「計測や単位」を学ぶ授業での図書活用方法を説明する先生

どの先生も積極的に実習に取り組み、研修後のアンケートでも反応は上々でした。年明けに、聴き取り調査をしたところ15人中14人の先生が既に自分の授業で図書活用を実践していて、生徒からも「教科書だけの授業より興味を持った」「もっと自分で学習したことを調べてみたくなった」との声が聞かれました。

より充実した研修に向けて

応用研修では、図書館担当の先生・生徒ボランティアを対象に「図書館サイン・図書館展示」研修も実施しました。

研修後スタッフから、「初挑戦で、授業の内容を理解したり、先生へのアプローチなど難しい部分もあったけれど、先生が関心を持ってくれてよかった。次の研修では、自分たちもアイデアシートの書き方など、もっと勉強を重ねて先生たちをサポートできるようにしたい」との意見が出ました。2021年度は、2020年度に図書館を開設したサカ・シンフープ中等学校で開催します。(日本NGO連携無償資金協力「ビエンチャン県における中学校の図書館整備を通じた読書推進事業」)

(渡邊淳子/ラオス事務所駐在)



図書館展示の実習で「地理」に関連した展示を披露する先生と生徒。

研修の詳しい様子はホームページのスタッフブログで紹介しています。
<http://deknoylao.cocolog-nifty.com/blog/2021/01/post-e02fb4.html>



講師を務めた下田さんから

今回の応用研修では、事務所スタッフが綿密な準備をして学校教育について理解を深めていきました。それはスタッフにとって、これまでの活動とはまったく違ったものでした。

研修に先立って図書館担当の先生とスタッフとで事前打ち合わせをした際には、スタッフから説明を受けても先生たちにはイメージできないようで、まだ他人事のような表情を浮かべていました。ところが研修の3日間、先生たちがどんどん引き込まれていく様子が伝わってきました。スタッフにも現地の先生たちにも素晴らしい化学反応が起こったのだと感じました。ボンサイ中等学校図書館の成長が楽しみです。



最終日。修了証書を手にも、下田さんも一緒にみんなで記念撮影

ダム被災地の学校から詩が届き、絵本づくりワークショップを開催

2018年にダムが決壊し、被災したアタプー県サナムサイ郡の小中学校に、当会は2019年、図書館支援の視察に行きました。

それから暫くして、サナムサイ中等学校の先生から、二篇の詩が送られてきました。水害の時のこと、それからのこと…、綴られた想いをなにかカタチにできないかということで、ラオス事務所では先生の詩と生徒の画を併せた詩集絵本を出版することを思いました。



詩の巻物に自分の体験や気持ちを貼って、あの時をふりかえって…

「2020年度公益信託大成建設自然・歴史環境基金」の助成を得てプロジェクトが始動し、12月22・25日、同中等学校の先生・生徒40人と、絵本づくりワークショップを実施しました。

先生の書いた詩をみんなで朗読し、被災したときの経験やそのときの気持ちをグループで話し合い、共有しました。午後からは思い思いに絵を描きました。用意された色とりどりのクレヨンと絵の具に、生徒たちは「こんなにいっぱいの色で描くの、はじめて!」と夢中になって描き、最後に、完成した絵に説明を添えて披露しました。水害から2年半が経った今、生徒たちがこれまで自分のなかにしまっていた気持ちを外に出して、前を向いていく助けになれば、と願っています。



500色のクレヨン、18色の絵の具を使って

ラオス事務所ではこれから編集作業に入ります。絵本を出版した5月にはサナムサイ郡の小中学校を再び訪れ、完成した本を配付するとともに、読み聞かせや防災マップを作成する絵本活用のワークショップを実施する予定です。一連の活動が、被災した生徒たちの心の復興となり、ふるさとの復興に対する思いや、水害の教訓、自然や災害への備えについて絵本を通じて考え、伝えていくきっかけとなるよう、活動を続けていきます。

ラオス語を母語としない地域に、学校図書室オープン

2020年11月からは、2つの学校で図書室を開設しました。

11月6日 HA326 ナーサム中等学校/ヴィエンチャン県ヒンフープ郡(支援:福岡那の香ライオンズクラブ)

12月29日 HA327 ヴァンタッド中学校/アタプー県サナムサイ郡(支援:沖電気工業株式会社)

どちらも町から離れたところにある、少数民族の子どもが多く通う学校です。周りに本が無くラオス語が母語ではない子どもたちにとってとても大切な図書室を設置することができました。

アタプー県では、3月にサナムサイ郡の5つの学校図書室を開設・フォローアップしましたが、新型コロナウイルスによる学校閉鎖で生徒が参加できなかったため、12月に再訪し、生徒を交えた研修・フォローアップを実施しました。

(ベルマーク教育助成財団助成金)



ヴァンタッド中学は寄宿学校、図書室開設を機に学校は電気を整備

東京事務所 イベント・ボランティア絶賛募集中!

サバイディー! イベント・ボランティアの飯川と高橋です。私達は学生時代にラオスで教育支援を行う学生団体スーンに所属していました。社会人になっても大好きなラオスの子ども達のためにできることがないかという想いで、「ラオスのこども」の活動ミーティングの企画をしています。2020年7月は「ラオス駐在員から聞くコロナ禍のラオス」、11月は「絵本の良さを再発見しよう」、そして2021年1月は「紙芝居支援について学ぼう」。

本業でプロジェクト・マネジメントを行う飯川が全体管理を行い、自身も絵本制作を行う高橋は楽しい企画アイデアを出したりと、一人ひとりの得意なことを活かしています。

最初はこの2人だった企画メンバーも6人に増えました。毎回かにか多くの方にイベントに参加いただき、ラオスのこどものファンを増やせるか、オンライン会議で話し合いながら企画しています。ラオスとまた関わりを持てるだけでなく、イベントや企画準備を通じて、会社以外で同じ興味関心を持つ仲間ができることも嬉しいです。

イベント・ボランティアは、まだまだ募集中です。ラオスのこどもの活動にもう一步踏み込みたいと考えている方は、ぜひお気軽に連絡いただければと思います!

(p4で、飯川さんと高橋さんを紹介しています)

はじめる・つながる・つくりだす [2020.11-2021.1]

ALC奨学金、15人の受給生が決定!

11月、当会マンスリーサポーターの支援によって行われているALC(ラオスのこども)奨学金の2020年度受給生が決まりました。先生への説明会、当会スタッフによる書類選考、学校での最終選考の面接を経て選ばれました。

2019年度のヴィエンチャン県ボンホン郡ボンサイ中等学校に加



サカ中等学校の奨学生5人

えて、同郡サカ中等学校、ヒンフープ郡ヒンフープ中等学校から各校5年生から7年生(日本の高校1年生から3年生に相当)の5人、3校で合計15人の生徒です。

ひとり親家庭あるいは大家族であったり経済的に厳しいなど、様々な事情で就学が困難な状況にある彼らに、ALC奨学金が、学校生活を続け、将来の夢をつかむ手助けになることを願っています。

当会ではマンスリーサポーターを募集しています。ご支援、お待ちしております。

マンスリーサポーターにご関心のある方はホームページのこちらの説明をご覧ください。
http://www.deknoylao.net/part_6/part_6_4.htm



「ラオスのこども」の仲間たち

学生時代、ラオスに惹かれ、社会人の今も



左が高橋さん、右が飯川さん

飯川桃子(理事・ボランティア)

ラオスと飯川さんの出会いは、早稲田大学の「ラオス学校建設教育支援プロジェクト～スーン～」でした。小学生のとき、家族で行った海外旅行先で出会った、ストリートチルドレンの姿に衝撃を受け、そんな子どもたちが生活できるように教育の機会を提供したいと考え、国際ボランティアに興味を持ち、スーンに参加することを決めたそうです。スーンの活動の中で会のことを知り、もっと会の活動に参加したいと思いインターンとしてラオス事務所で活動を行いました。活動の中では、現地スタッフとの交流を通して同僚として認められた経験が、社会人になっても海外の人と一緒に働きたいと思ったきっかけとなり、今につながっているとのこと。

ラオスの大好きなところは、人も食べ物はもちろんのことですがラオ語の独特な音や表現です。ずっと聞いていたくなるそうです。今後のボランティア活動では、イベントを通してラオスの魅力をもっと多くの人に伝えたいと語ってくれました。

高橋瑞季(ボランティア)

ラオスとの出会いは、高校の頃に研修で行ったラオス視察。日本がラオスに対して行う支援の現場を生で見、大学では教育の問題や国際開発学を学びたいという目標ができたが高橋さんは話します。大学時代にはスーンの活動に参加し、ラオスとの関わりを持

表紙の写真

アタプー県トンテー中学校図書室フォローアップのひとコマ。絵本「穴に落ちたヒヨコ」を手にした生徒たちに「読んでみて、お話しさせて～」とお願いしたところ、初めはモジモジしてた少年たち。スラビー所長が「ほら、こんな感じで～」と見本をみせると、それにつられてだんだんと声が…。読んでるうちに主人公と仲間の掛け合いが面白くなってきて、一緒に大笑い。

ラオスのこども通信 79号

2021年2月発行 代表:チャントソン・インタヴォン 編集人:森透
発行: Action with Lao Children / Deknoylao
(認定)特定非営利活動法人 ラオスのこども
〒143-0025東京都大田区南馬込6-29-12 ミキハイツ303
TEL/FAX 03-3755-1603
e-mail: alctk@deknoylao.net
<http://deknoylao.net>
都営地下鉄浅草線西馬込南口下車徒歩7分
郵便振替 00140-6-462494



特定非営利活動法人ラオスのこども

組織の理念「ラオスのこども」は、公正で平和な社会づくりに貢献することを目的として、子どもたちが自らの力を伸ばし、人生を主体的に選択できるよう、日本とラオスの人々が協働しながら、読書に親しむ環境をつくります。

ち続けました。

高橋さんと会との出会いは、社会人になってから飯川さんに誘われて参加した、ピーマイパーティでした。ラオス好きの人と出会えたことが嬉しく、ラオスはもちろんのこと絵本も大好きで、その両方に関われることに魅力を感じたとのこと。

ラオスの好きなどころは、日本にはないラオスの独特な時間の流れ。物質的な豊かさではなく、人や自然からあふれる豊かさがとても魅力的だと感じているそうです。今後は、「ラオス語絵本プロジェクト*」のコンテンツを増やしたり、イベントを企画したりして、活動の幅を広げていきたいと語ってくれました。

ボランティアとして、イベントの企画・運営・開催に携わっている2人は、それぞれの得意分野を生かしながらチームワークを作っています。ラオスへの情熱と旺盛な好奇心で、会の活動をさらに一緒に盛り上げてもらえたら嬉しいです。

*日本語の絵本のラオス語の翻訳シートを貼り付けてラオスに送るボランティア活動。

(聞き手 伊藤珠希/東京事務所スタッフ)

メコンのほitori速

ヤギもウシも通る…、ラオス初の高速道路

2020年12月、ヴィエンチャン(首都)ーヴァンヴィエン(ヴィエンチャン県)間にラオスで初めての高速道路が開通しました。

この高速沿いには、当会が図書館支援をしている中等学校があります。開通後はじめての出張で高速を使ってみると、いつもの凸凹の地道と違い整備された道路でどんどんスピードを上げる車…。黙ってじっと前方を見つめるスタッフ達…(ふだんは車内で歌謡曲を聞きながらお喋りしながら賑やかなんですが笑)。今まで4時間かかったヒンフープ中に2時間半で到着しました。途中、建設中のサービスエリアも見えました。

近代的な高速道路の外には、ラオスの田舎の風景が広がり、と

料金所、ヒンフープまでは
76,000キープ



乗用車は、時速制限120キロ

きおり外から入り込んでしまった山羊や牛の姿が。料金所で間違えてETCゲートに入ってしまうバックするスタッフ。道路が正式に開通する前から(工事中なのに)車や農耕車が通るなど、ラオスらしいのんびりさも。今後、高速道路はさらに北のルアンパバーンまで延びる予定。便利になる一方、これからさらに急速な勢いでこの国が変わっていく予感がします。(渡邊淳子)